

展望 音読と黙読

水辺あお

高齢者の音読がブームである。認知症予防らしい。小学校低学年のころはみなで音読することもあったが、大人になるにしたがって黙読ばかりになった。図書館や電車内で音読することはできないし、黙読は礼儀だ。

とはいえ、万葉集や古今集などの和歌の多くは、朗詠されたものが文字化されたものだ。本来は音読されていた。もちろん、その朗詠がどのような節回しだったのかは定かではない。朗々たる声調で万葉集を読む犬養孝の犬養節も自己流という。

宮中歌会始などの朗詠は、たとえば坊城俊周「歌会始と披講」(『宮中新年歌会始』)によれば、平安時代以後形成されてきた口伝の「読み上げの方法」とあるが、平安時代以前の記紀歌謡や万葉集がどうであったかは不明だ。

近現代短歌のほうは福島泰樹の絶叫短歌コンサートを除けば、多くは朗詠を前提としていない。そんななかで近現代の歌人たちが自作短歌を朗読した音声記録は貴重だ。『現代短歌朗読集成』(同朋舎メディアプラン)は、戦前からの数回にわたる音声記録を集成した

もので、明治期の佐佐木信綱、与謝野晶子、斎藤茂吉、北原白秋から、現在も活躍する歌人たちの肉声の自作朗読がある。コスモス関係の歌人では宮柊二、田谷鋭、高野公彦、小島ゆかりである。

歌人たちの自作朗読の節回しはそれぞれの個性があり、祝詞や詩吟のような朗誦、朗詠から、ひとりごとのような淡々とした朗読まで多種多様だ。なかには塚本邦雄のフルートや前登志夫のピアノ、寺山修司の大正琴、佐佐木幸綱のギターなどBGM入りもあり、歌人の個人的趣向も感じられておもしろい。

「朗詠集」ではなく「朗読集」としたのは、現代歌人は多く節回しを重視した朗詠ではなく、淡々と読み上げる朗読を好むからだろう。たとえば斎藤茂吉の

ガレージヘトトラックひとつ入らむとす少
したためらひ入りてゆきたり

など、その朴訥な朗読がかえって効果的だ。
高野公彦の

雨月の夜蜜の暗さとなりにけり野沢凡兆
その妻羽紅

も淡々とした口調ゆえに、私は藤沢周平の世界に自然にタイムスリップしてしまふ。

池田はるみの「母が国大阪」の一連の歌の味わいは、黙読や標準語の朗読では出ない。

大阪弁で朗読することで格段に深まっている。

むかしゐし犬のアチャコはむちゃくちや
でござりまするといへば走りき

万葉集や古今集などは多く近畿地方の言葉だったろうから、標準語より大阪弁のほうが和歌の伝統の声調に近いかもしれない。

他方、近年は必ずしも朗読を前提としない歌もみられるようになった。「！」や「▼」を多用し視覚的にもおもしろく、意味も深いのだが、朗誦も朗読もできない。

現在、結社の歌会などなら披講もあり、朗読の機会もあるが、多くは雑誌やネットを読むだけで終わってしまう。そもそも人前で朗誦や朗読をするには、音感や発声などの才も求められ、それなりの覚悟が要る。現代歌人は自らは歌わない作詞家のようなものだ。

とはいえ、自作の推敲から完成までの間に何度も人知れず朗読したほうが望ましいのも確かだろう。舌頭千転で、字余り字足らず、句われ句またがりの妙もわかるだろう。当然、自作ではない歌も朗読することで、その奥深さに一層浸れよう。